

## 杜牧と韓愈の関係について

愛甲, 弘志  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9765>

---

出版情報：中国文学論集. 10, pp.73-94, 1981-11-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



## 杜牧と韓愈との關係

愛 甲 弘 志

一般に、杜牧（八〇三〜八五三）は、晩唐の文人といわれているが、彼には、中唐の大詩人白居易（七二二〜八四六）・韓愈（七六八〜八二四）・柳宗元（七七三〜八一九）らと時代を同じくした時期があり、嚴密には中唐から晩唐へと文壇が流れ移るその端境期に生きた人物であったといえる。そのような時代に生きていたからこそ、杜牧は、これらの大詩人達から直接的にと言ってよいほど何らかの形で影響を受け得る可能性をじゅうぶんに持っており、杜牧と中唐詩人との關わりは、杜牧の文學を形成する上で決して看過せない問題となつてきている。特に、杜牧と韓愈との關係は、これまで多くの論者によってその深い關聯性を指摘し問題にされつづけてきたが、しかし、十分に納得できる結論をみない。そこで、私は、これまでの論者が取っている方法、つまり、杜牧と韓愈とを密接に結びつけようとする、いわば正の關係を延長的に考えた後でそれとは逆に、むしろ、杜牧と韓愈との間に横たわる相違點に留意しながら兩者における負の關係をも考えてみたい。

杜牧と韓愈との關係（愛甲弘志）

一 杜牧と韓愈との關係についての從來の評價

從來、杜牧と韓愈との關係を論じる場合に、けっして見逃すことのできない資料がある。次に掲げる二つの詩がそれである。

韓杜の集を讀む

杜詩韓集愁來讀 杜詩韓集愁ひ來たりて讀む

似倩麻姑癢處搔 麻姑を倩やとひて癢處を搔くに似たり

天外鳳凰誰得髓 天外鳳凰誰か髓を得たる

無人解合續弦膠 人の續弦膠を合するを解する無し

(樊川文集卷二)

この詩から、杜甫の詩・韓愈の文に對する杜牧の絶贊ぶりが窺われるし、次の詩からも同様に、杜牧の韓愈への評價の高さが讀みとられる。

冬至日、小姪阿宜に寄するの詩

李杜泛浩浩 李杜浩浩に泛かび

韓柳摩蒼蒼 韓柳蒼蒼に摩す

近者四君子 近ごろ四君子

與古爭強梁 古と強梁を争ふ

(樊川文集卷一)

この詩も、「李杜」「韓柳」と並稱していることから、詩における「李白・杜甫」、散文における「韓愈・柳宗元」の價値を認めていることがわかる。

彼ら李白・杜甫・韓愈・柳宗元の四人に對する(杜牧の)評價について、荒井健氏は、その著『杜牧』の中で「詩における李杜、散文における韓柳、現在ではそれぞれの分野で唐代を代表する文學として、だれ知らぬものなき大きな名前になっているが、杜牧の時代には決してそうではなかった。特に韓柳は評價未確定の、杜牧にとってはまさに現代の文學だったのだ。それらを古代の偉大な傳統につらなるものとして逸早く絶對的な地位をみとめた點は、たしかに慧眼であった<sup>(注)</sup>と述べている。

杜牧が、詩における「李白・杜甫」、散文における「韓愈・柳宗元」を價値ある人物として評價していたことは、市野澤寅雄氏の『杜牧』(漢詩大系14 集英社)・鈴木修次氏の『唐代詩人論』(第四卷「杜牧」の項 講談社)・山内春夫氏の「杜牧と李商隱との關係について」(吉川博士退休紀念中國文學論集 筑摩書房)・繆鉞氏の『杜牧傳』(人民文學出版社 一九七七・六)などの諸論文の中でもほぼ同様の見解がみられる。

ところで、本稿では、韓愈との關係だけに焦點を絞っているので、先に掲げた各氏の杜牧の韓愈評價論について、更に整理してみることにする。

まず、市野澤氏の論文は、「獻詩啓」(樊川文集卷十六)の次の部分を擧げている。

杜牧と韓愈との關係 (愛甲弘志)

某苦心して詩を爲り、本高絶を求めて、奇麗に務めず、習俗に涉らず、今ならず古ならず、中間に處る。

そして市野澤氏は、この文で言うところの「本高絶を求めて」が、杜甫を宗旨とする意味であるとともに、「高絶」のもう一つの着眼點が韓愈にもあり、彼の詩文雙方について尊崇していたと述べている。

また鈴木氏の論文は、杜牧が韓愈を高く買うのは、主要にはその古文に對してであるかと述べ、「答莊充書」(樊川文集卷十三)の次の部分を擧げている。

凡そ文を爲るには、意を以て主と爲し、氣を輔と爲し、辭彩章句を以て之が兵衛と爲す。

そして鈴木氏は、これが、韓愈の古文の主張とまったく共通するものがあると述べている。さらに鈴木氏は、詩の方面でも、杜牧が韓愈の門人李賀の詩集の序文をしるししていることから察せられるように、韓愈の詩についての努力の方向も、これを承知し評價の中に加えていたであろうとし、詩人としての韓愈は、杜甫の言語造型面における繼承者であり、詩人としての杜牧も、杜甫—韓愈—李賀の方向・系譜を繼承し、發展させる立場にたつたと述べている。

さらに山内氏の論文は、市野澤氏の論を参照しつつ、駢文を善くする李商隱が、駢文の定型の打破をめざす古文を唱導した韓愈のその文章を、極めて高く評價し賞賛する「韓碑」詩を作ったのは、彼が尊敬し傾倒していた杜牧の詩のよりどころが、韓愈にあったからであると述べている。

繆鉞氏は、先の詩の他に資料を示してはいないが、杜牧の古文と長篇五言古詩は疑いもなく韓愈の影響を受けていると述べている。

以上、概略ながら各氏の杜牧の韓愈評價及び影響關係について紹介したが、要するに杜牧は、韓愈を詩文兩面に

において、かなり崇敬すべき人物として意識していたことがわかる。

ところで、各氏が掲げる資料の他に、更に杜牧が韓愈に言及している資料を見出すことができる。すなわち「池州造刻漏記」(樊川文集卷十)がそれである。この文は、會昌五年(八四五)杜牧が池州刺史の任にあった時の作である。

某童たりし時、王處士年七十、常に某の家に來たる。大演數と雜機巧とに精しく、地に泉有るを識り、鑿てば必ず湧き起こる。韓文公多く之と遊ぶ。大和四年、某宣城より京師に使ひす。處士年九十に餘るも、精神衰へず。某牀下に拜し、刻漏に言及し、因りて圖して之を授かる。

これは、杜牧が池州に刻漏(水時計)を作るにあたって、王易簡なる人物から、その技術を傳授してもらった事を述べた文である。この中にいう王處士(易簡)なる人物については詳らかではないが、「韓文公多く之と遊ぶ」という記述から、韓愈が、この王易簡とよく往來していたことは明らかであり、更にこの文全體から杜牧と韓愈との距離の近さが窺われるようである。杜牧が幼童であった時とは、この文中にいう王易簡の年から逆算するならば、大和四年(八三〇)杜牧二十八歳)より二十年餘り以前の元和二、三年(八〇七、八)と推定され、その時杜牧は五歳前後であった。このころ韓愈はいえは、元和元年に權知國士博士として長安におり、元和二年には、東都(洛陽)に分司し、元和三年には國子博士として長安におり、元和四年と五年は洛陽に、元和六年以降元和十四年の「論佛骨表」を奉って潮州刺史に流されるまでは、ずっと長安にいる。杜牧は、大和元年(八二七)の科擧の試験に合格する二十五歳までは、ずっと長安にいるから、この文を読む限りでは、杜牧の意識の中には、韓愈を同時代

の人と考える以上に、距離的にもかなり近い存在としてとらえていたといえる。杜牧が幼なかつたとはいえ、王易簡を介して韓愈の話をよく聞いていたであろうし、或いは、何らかの形で韓愈と面識があつたことも充分にありうることである。

## 二 創作理論・修辭面における相似點

ところで、従來、杜牧と韓愈との關係を論じる場合、冒頭に掲げた「讀韓杜集」と「冬至日寄小姪阿宜詩」の二つの詩に依つて、杜牧が韓愈を高く評價していたという結論を導き出すのに重點を置き、實際に、杜牧が、創作理論、或いは修辭面に於て、どのように韓愈を繼承し發展させていったかについては、まだ十分な論證が成されていない。特に、「讀韓杜集」や「冬至日寄小姪阿宜詩」で韓愈を稱揚しているのは、韓愈の散文を念頭に置いていると考えられているものにも拘らず、散文における杜牧と韓愈との具體的關係については、殆ど説かれていない。そこで私は、杜牧の散文が、韓愈の散文から具體的に創作理論・修辭面に於てどのような影響を受けているのかについて論じてみたい。

杜牧の散文が韓愈の散文から影響を受けていることに關しては、従來、古文運動との關わりの中で論じられており、それが散文における杜牧と韓愈とをつなぐとする唯一の論證であるが、それについて今一度考えてみることにする。

杜牧の文學觀を如實に示している作品は、先に掲げた「答莊充書」である。

某、莊先輩の足下に白す。凡そ文を爲るは意を以て主と爲し、氣を輔と爲し、辭彩章句を以て、之が兵衛と爲す。未だ主の強盛にして、輔の飄逸ならざる者、兵衛の華赫にして莊整ならざる者有らず。四者高下圓折步驟して、主の指す所に隨ふこと、鳥の鳳に隨ひ、魚の龍に隨ひ、師衆の湯武に隨ふが如く、天に騰り泉に潛み、天下を横裂し、意の如くならざるは無し。苟しくも意先に立たず、止だ文彩辭句を以て、前に繞り後に捧ぐれば、是れ言愈よ多くして理愈よ亂れ、闖闖に入るや、紛紛然として、其の誰なるかを知る莫く、暮に散ずる如くなるのみ。是を以て意全く勝る者は、辭愈よ樸にして文愈よ高し。意勝らざる者は、辭愈よ華にして文愈よ鄙いし。是れ意は能く辭を遣るも、辭は意を成す能はず。大抵文を爲るの旨は此くの如し。

これは、杜牧が、莊充なる人物から彼の文集に序を書いてくれるように頼まれ、それに答えた書の前半部分である。ここで、文を作るにあたって、内容を重んじ辭彩章句は内容の次だとする杜牧の文學觀は、鈴木氏も論じるようにあの古文運動における創作理論とほぼ一致するかにみえる。古文運動について、林田愼之助氏は、次のごとく述べている。

駢文は六朝以來貴族官僚の意識のなかで培養され、ねりあげられてきた過度に修飾的な文體であつたが、四六の音樂的なリズムとそれが必然的に導く對偶表現に拘束され、そのなかに象嵌される典故措辭の工夫に制約をうける文體であつたがために、それが形式的に洗練化されるにしたがつて、表現を内側からささえる思想内容が空疎となる傾向がいちじるしく目立っていた。外面的な形式美のみに作家の意識の重點がかかるとき、内發的な思想の傳達が缺如して、文章の頽廢現象を惹起するのは當然であつた。安史の亂という未曾有の動亂のな



かで、莊園を破壊され經濟的基盤を失いつつあった貴族豪族出身の官僚が、それを機に漸次官界から後退してゆく傾向がでてくるが、韓愈の生存當時はまだ官界における文章通念として、四六駢體文が従来どおり隠然たるちからをもって君臨していた。安史の亂の過程で擡頭してきた新興地主層出身の文人官僚が秦漢以前の文章表現を學び、駢文に代る新しい文體を模索したのは、唐王朝の危機感を切實にいだいて四六のリズムの枠組のなかに閉ざされていた士大夫の意識の變革をめざしていたからである。したがって、それを「古文」と稱するが、それは秦漢期の文章の復元模倣ではなく、新しい時代にふさわしい文體の創造と確立をねらいとするものであった。<sup>注(2)</sup>

杜牧の散文創作理論はまさに古文運動の創作理論と一致するものがあるといえる。この、「答莊充書」にみられる杜牧の文學觀は、韓愈の古文運動を準備させたといえる梁肅（七五三—七九三）の「補闕李君前集序」（全唐文卷五百十八）で述べる次の部分とも似ている。

炎漢の制度、霸王の道を以て之に雜ふ。故に其の文も亦二つなり。賈生・馬遷・劉向・班固、其の文博厚にして王風に出づる者なり。枚叔・相如・揚雄・張衡、其の文雄富にして霸塗に出づる者なり。其の後の作者は、理勝れば則ち文薄く、文勝れば則ち理消ゆ。理消ゆれば則ち言愈繁くして、繁ければ則ち亂る。文薄ければ則ち意愈よ巧にして、巧なれば則ち弱し。故に文は道に本づき、道を失へば之を傳ふるに氣を以てし、氣足らざれば則ち之を飾るに辭を以てす。蓋し道は能く氣を兼ね、氣は能く辭を兼ね、辭當たらざれば則ち文斯れ敗る。ここで、梁肅が「故に文は道に本づき、道を失へば則ち之を傳ふるに氣を以てし、氣足らざれば則ち之を飾るに

辭を以てす」と述べているのは、杜牧の「凡そ文を爲るは意を以て主と爲し、氣を輔と爲し、辭彩章句を以て、之が兵衛と爲す」と述べている部分とはほぼ對應しており、言辭の華やかさよりも内容を尊ぶという點に於ては、全く一致しているといえる。この梁肅なる人物は、唐書卷二百二に傳があり、それに依ると、彼は、杜牧の祖父杜佑に招かれて、淮南の掌書記になつてゐることから、時代的には杜牧と重なるものではないが、杜牧にとって身近な人物であるのにはかわりはないから、或いは杜牧は、この梁肅からなんらかの影響を受けたのかもしれない。さらに「答莊充書」の後半部分を讀んでみる。

今某の取るべき無きを以て、命じて以て序を爲さんと欲す。厚意を承當するも、惕息として不安なり。復た古より其の文に序する者を觀るに、皆後世其の人を宗師として之を作る。詩・書・春秋・左氏以降百家の説皆是なり。古は、其の身世に遇せられずんば、志を言に寄せ言の後世に遇せられんことを求むるなり。兩漢より以來、富貴なる者千百、今より之を觀るに、聲勢光明たるもの、孰か馬遷・相如・賈誼・劉向・揚雄の徒の若くならんや。斯の人たるや豈に當世に知られんことを求めんや。故に親しきもの揚子雲の書を著すを見て、取りて醬甌を覆はんと欲す。雄其の時に當たりて、亦未だ嘗て自ら誇目有らず。

このように、兩漢以降、聲勢光明あるものは、司馬遷・司馬相如・賈誼・劉向・揚雄であり、彼らは、在世中に名聲を求めるようなことは決してしなかつたという。このような議論は韓愈にもある。すなわち「答劉正夫書」には次のごとく述べている。

夫れ百物の朝夕に見る所の者は、人皆注視せず。其の異なる者を觀るに及んで、則ち共に觀て之を言ふ。夫れ

文は豈に是に異ならんや。漢朝の人は能く文を爲らざるは莫し。獨だ司馬相如・太史公・劉向・揚雄のみ之を爲りて最たり。然らば則ち功を用いることの深き者は、名を收むるや遠し。若し皆世と沉浮し、自ら樹立せざれば、當時の怪しむ所と爲らずと雖も、亦必ず後世に之傳はること無し。

(韓昌黎文集卷三)

この中、世の中と等しく浮き沈みしていたならば、後世にまで名を残すことはなかったであろうと言ひ、漢代に擧げべき人物に、司馬相如・司馬遷・劉向・揚雄がいるとするこの韓愈の論は、先に擧げた杜牧の「答莊充書」の後半部分と一致するといえる。

以上、杜牧の文學觀を最もよく示していると思われる「答莊充書」から、杜牧と韓愈との關係を論じてきたが、更に一步進めて從來個々の作品の上での影響關係について、具體的に兩者の相似點を指摘したものが少なく、殊に杜牧が韓愈を高く評價するのは、主に散文に對してであると考えられるにも拘らず、散文に於ける影響關係を指摘するものは全くない。したがってここで、杜牧の散文と韓愈の散文とが共通の主題の下に書かれているもの、また杜牧が韓愈の散文を意識して作ったと考えられる散文に焦點をしばほつて論じてみたい。

まず、杜牧の「論相」(樊川文集卷五)についてであるが、この「論相」は、その末尾に「余讀荀卿非相、因感呂氏・楊氏、知卿爲大儒矣」とあるように、『荀子』の「非相篇」を意識して書かれたもので、人相によって人を判斷することの愚かしさを述べたものである。『荀子』という書物は、元和十三年(八一八)に初めて楊倞なる人物によって注を施されており、この時代の人の『荀子』に對する關心は高かったものと思われる。韓愈にも、「讀荀

「子」(韓昌黎文集卷三)という文がある。ところで、杜牧の「論相」以前にも、人相によって人を判断することの愚かしさを説く文がある。すなわち、韓愈の「雜說四首」(韓昌黎文集卷三卷)の其の三がそれである。その中に、「然則觀貌之是非、不若論其心與其行事之可否爲不失也」とあり、人を容貌によって判断するよりは、その人の心と行ないによって判断する方がよいと述べている。この韓愈の「雜說四首」の其の三と杜牧の「論相」との影響關係は、一概に論じにくいが、兩者共に『荀子』の「非相篇」を意識していることは確實である。

次に、杜牧の「原十六衛」についてであるが、この「原——」というスタイルは、韓愈の「原道」について、清水茂氏が、次のように述べている。

韓愈が「道」とまっ正面から取り組んで、書いた論文は、「原道」(集卷十一)と名づけられる。原は本源をさし、本来の意味における「道」とは何かということ論じたエッセイである。韓愈は、ほかに、「原性」「原毀」「原人」「原鬼」の原類といわれる一類があり、後にそれになって、いろいろの作家が、「原……」という文を書いていく。韓愈には原始的な形にこそ、眞實の姿があると、考えられたからこそ、その眞の道についての議論を、かれは「原道」と名づけたのである。<sup>注(9)</sup>

杜牧が「原十六衛」と名づけたのも、十六衛を復すべきことを説かんが爲に、隋代までにその源を求めているからであり、韓愈の「原——」と題した一連の作品と趣旨は全く同じで、杜牧が、韓愈のスタイルを倣っているのは明らかである。

### 三 杜牧と韓愈との相違點

これまで私は、杜牧と韓愈との關係について、從來の論者が説いてきたように、この兩者を密接に結びつけようとする方向で考えてきた。確かに、「冬至日寄小姪阿宜詩」や「讀韓杜集」の中で、杜牧が韓愈を高く評價しているように、幾つかの韓愈からの影響關係を指摘することができるが、杜牧の思想の根底には、究極的に韓愈からの文學的、思想的受容を拒否しているところがあるように思われる。そこで杜牧と韓愈との影響關係をよりいっそう明確にするため兩者の相違點を指摘する頁の關係について論じてみたい。

杜牧には、經世家、或いは歴史家としての自負があった。

僕、元和より已來、以て今日に至るまで、其の見聞する所は、名公才人の論討する所、典刑制度、征伐叛亂なり。其の當時を考へ、前古に參じ、能く忘失せずして思念し、亦た以て一家の事業と爲すべし。

(樊川文集卷十三「上池州李使君書」)

この「上池州李使君書」に見られる杜牧の經世家、歴史家としての自負は、實際に、時の朝廷の認める所であり、「上李太尉北邊事啓」(『樊川文集』卷十六)や「上李司徒相公論用兵書」(同卷十一)などの論策は、見事、功を奏しており、「守論」「罪言」「原十六衛」「戰論」(以上卷五)等は、後世の論者の高く評價する作品である。また彼は『孫子』に注を施しており、彼の經世家・歴史家としてのかなりな自負は、實作に裏づけられたものであった。杜牧が、このように、政治と歴史に強い關心を持つ原因については、いろいろ考えられる。まず、第一に、當時の

時代状況である。唐代も末になると、天子の力が衰え、代りに、地方に散在する藩鎮が力を蓄え、虎視眈眈と機會を窺うような、ひじょうに血腥い時代になってくる。このような藩鎮の争いによって必然的に導かれる國家全體の滅亡への危機感から、杜牧は、國家復興の旗手たらんことを冀つたのである。このような杜牧が、晩唐と時代状況の似通う戰國末期に生きた荀卿に共鳴するのは當然のことであつたといえる。荀子の歴史意識がどのようなものであつたかについては、内山俊彦氏が『荀子』の中で、

（荀子が）社會、國家をかように發生史的に考える歴史意識は、歴史を動的に見る意識であるから、その中には、君主によって行わらるべき政治のあり方、國家のとるべき姿もまた、固定したものとしてでなく、變動するものとして、考えられることになる。孔子や孟子の、歴史の質的變化を發想しない立場に比較して、荀子の歴史意識は、社會や政治の變遷をリアルに、柔軟にとらえる方向に開かれていた。歴史への、囚われぬ眼を持つていた、ともいえよう。<sup>注(4)</sup>

と述べる。この「囚われぬ眼」を持つものこそ、激動の時代にあつて必要とされる人物であり、歴史を、政治を正確に語りうる人物でもあるといえる。杜牧が、荀子に興味を抱き始めた時期は、かなり早い時期であつたようである。杜牧十六歳の元和十三年に、楊僚なる人物が『荀子』に初めて注を施している。杜牧が十六歳のころといえ、<sup>注(4)</sup>「注孫子序」（樊川文集卷十）によると、山東の藩鎮が反亂を起こしたのをきっかけに、彼が政治・歴史に興味を抱きはじめた頃でもある。その爲に、現在残っている杜牧の作品で、最も早い時期に作られたと認められる「阿房宮賦」（樊川文集卷一）は、憲宗の奢侈ぶりを秦の時代に假託して諷刺するという、ひじょうに強い政治意識の下で

杜牧と韓愈との關係（愛甲弘志）

書かれている。このように杜牧には、唐王朝の衰退を必死になってくい止めようとする士大夫としての自覺がある。

杜牧が、荀子をよりどころとするのは、單に政治觀・歴史觀のみに止まらない。それは、人間觀にまで及んでいる。例えば、人間の性と情について論じている「三子言性辯」(樊川文集卷六)は、『荀子』の「性惡篇」を意識して書いており、その末尾で、

荀は人の性の惡なるを言ふ。二子(孟子・揚子)に比ぶるに、荀は得ること多し。

と述べ、荀子の「性惡」説に贊同している。

また、人相によって人を判斷することの愚かしさを説く「論相」(樊川文集卷五)も、『荀子』の「非相篇」を意識して書いており、その末尾で、

余、荀卿の「非相」を讀み、呂氏・楊氏に感じ、卿の大儒たるを知る。

とあり、荀子への傾倒ぶりを示している。このように、杜牧の政治觀・歴史觀・人間觀などが、かなり荀子の影響を受けているといえるのに對し、韓愈の荀子に對する評價は若干異なるものがある。韓愈に「讀荀」という作品がある。

聖人の道、世に傳はらず。……其れ存して醇なる者は、孟軻氏のみ。揚雄氏のみ。荀氏の書を得るに及びて、是に於て、又荀氏といふ者を知るなり。其の辭を考ふるに、時に粹ならざるがごとくなれども、其の歸を要するに、孔子と異なる者鮮し。抑々猶ほ軻・雄の間に在るか。孔子詩書を刪し、春秋を筆削す。道に合ふ者は、

之を著し、道を離るる者は、之を黜去す。故に詩書春秋は疵無し。余荀氏の合はざる者を削り、聖人の籍に附せんと欲す。亦孔子の志か。孟氏は醇にして醇なる者なり。荀と揚とは大醇にして小疵あり。

(韓昌黎文集卷一)

ここで、韓愈は、荀子を「其の辭を考ふるに、時に粹ならざるが若くなれども、其の歸を要するに、孔子と異なる者鮮し」と、やや持ち上げながらも、やはり孟子の「醇にして醇なる者」に及ばない「大醇にして小疵」と評している。また、「原道」には、

周公は之を孔子に傳へ、孔子は之を孟軻に傳ふ。軻の死するや其の傳を得ず。荀と揚とは、擇んで精しからず、語って詳らかならず。

(韓昌黎文集卷一)

とあり、先の「讀荀」と同様の論調で、儒教における荀子の地位を決して高いものと考えてはいない。この荀子を、杜牧が「論相」の中で、「卿の大儒たるを知る」というように高く評價しているのは、その認識に大きな違いがあると考えられる。つまり、韓愈の荀子評價は、儒教の流れの中で捉えようとしている。だから、孔子から曾子、曾子から孟子へという、いわゆる正統儒教の流れには乗らない荀子を、孔子や孟子ほどに高く評價しないのである。これに對し、杜牧の荀子評價は、彼の歴史觀・政治觀ひいては人間觀のよりどころとして荀子があるので、彼の荀子に對する評價は、かなり高いものである。

もっとも、韓愈が、儒教を深く信奉する人であったことを、杜牧は知っていたようである。すなわち「書處州韓

杜牧と韓愈との關係 (愛甲弘志)



吏部孔子廟碑陰」(樊川文集卷六)の終りの部分で杜牧は次の如く述べている。

韓吏部の夫子廟碑に曰く、天下の通祀は、唯だ社禩と夫子とのみ。社禩は壇して屋せず、異代を取りて配と爲す。未だ夫子の巍然として門に當たり、王者の禮を用い、門人を以て配と爲し、天子より庶人に至るまで親しく北面して之を師とするに若かず。夫子は徳を以てし、社禩は功を以てし、固より次第有り。因りて孟子を引きて曰く、生人より已來、未だ夫子のごとき者有らざるなり。古より夫子を稱する者多し。夫子の徳を稱するは孟子に如くはなく、夫子の尊を稱するは韓吏部に如くはなし。故に其の碑陰に書して云ふ。

この碑陰が記された時期は示されていないが、碑陰に記すという性格上、おそらくは、杜牧が考功郎中知制誥にあつた晩年の作であろう。この碑陰において、杜牧は、「夫子の徳を稱するは孟子に如くはなく、夫子の尊を稱するは韓吏部に如くはなし」と述べて、孔子の徳を稱揚することにかけては孟子が第一人者であり、孔子の尊いことを稱揚することにかけては韓愈が第一人者であることをはっきりと認めている。事實、韓愈自身も、彼の諸作品の中で、孔子を師奉し、彼の教えである儒教を稱揚し、なおかつ孟子に亞ぐ人物であることを自認している。韓愈が、熱心な儒教信奉者であつたことは、既に杜牧の時代にあつては、衆知の事柄であつたといえよう。

杜牧が、彼の歴史觀・政治觀ひいては人間觀のよりどころを荀子に求めているのに對して、韓愈は、自分自身を正統儒教の流れに置くことから、世界を考えようとする。この兩者の思想の違ひは、必然的に文學觀の上においても、異なつた様相を呈するであらうことは容易に豫想できる。

杜牧も韓愈も古文を善くすることは、衆知の事實であり、辭彩章句といった外見的な修辭に意を注ぐよりも、内

容を重んじなければならぬという創作態度において共通するものがあることも既に先で觸れたとおりである。

ところが、兩者の文學理論を比較すると、そこには明らかな違いがみられる。韓愈が古文を作るのは、究極には道を明らかにする爲である。すなわち「題哀辭後」では次のように述べている。

愈の古文を爲るは、豈に獨だ其の句讀の今に類せざる者を取るのみならんや。古人を思へども見るを得ず。古道を學べば則ち兼ねて其の辭に通ぜんことを欲す。其の辭に通ずる者は本古道に志す者なり。

(韓昌黎文集卷五)

この古の道を學ぶ爲に、古文を作るのだとする主張は、韓愈の門人である李漢によって、よりはっきりとした文學的主張となつてくる。李漢は、韓愈の文集に序して次のように述べている。

文は道を貫く器なり。斯の道に深からずして、焉まに至る有る者あらず。

この主張が、後にいわれる載道主義である。

ところが、杜牧の散文には、殆どといつてよいほど「道」ということが見られない。杜牧の場合、文の效用は、さほど期待されず、ただ、「作者のこころ」をかなり重要視している。前に資料として掲げた梁肅の「補闕李君前集序」の中では「道」↓「氣」↓「辭」という配列の創作意識があったのに對して、杜牧の方は、「答莊充書」の中に、「意」↓「氣」↓「辭」という配列の創作意識がある。この「意」を重要視する杜牧の考え——荒井氏は主意主義と呼ぶ——は、韓愈の道を重要視する、いわゆる載道主義の文學態度とは明らかに異なるものがあつた。

#### 四 「讀韓杜集」と「冬至日寄小姪阿宜詩」における韓愈の評價への疑問

このようにいづれも儒教思想に立脚しながら、杜牧と韓愈との間にはその思想の認識に大きな越えがたい相違があり、そこから自然に人生觀文學觀の差異が導き出されてきていることがあきらかになった。こうしてみると、從來杜牧の韓愈評價論の出発点ともいえる「讀韓杜集」と「冬至日寄小姪阿宜詩」に對するの論者の解釋にもいささかの不安を覺えざるを得ない。そこで、この二詩への解釋を問題としながら、改めて杜牧と韓愈との關係について論じてみたい。

杜牧は、ある文人を作品の中に取り上げて評價する場合、作品によってその評価にかなり曖昧な點があるようである。先に掲げた「答莊充書」の中では、漢代以降擧げるべき人物に、司馬遷・司馬相如・賈誼・劉向・揚雄の五人を取り上げていた。これは、樊川文集を編んだ杜牧の甥にあたる裴延翰が、その序文の中で、列擧している人物とほぼ一致する。

ああ、文章は政と通じ、而して風俗は文を以て移る。三代の道に在りては、文と忠敬とを以て之に隨ふ。是れ理の具と爲し、運と高下す。古の作者の論を採探するに、屈原・宋玉・賈誼・司馬遷・相如・楊雄・劉向・班固を以て世の魁傑と爲す。然れども騷人の辭は、怨刺憤懣し、君臣の教化を及ぼすを援くと雖も、持論を霑治する能はず。相如・子雲は瑰麗詭變にして、諷多く要寡く、漫羨して歸する無く、治亂を見ず。賈・馬・劉・班は、時君の善否に乘じ、己の臆を直豁して、奮然として世を拯ひ物を扶くるを以て任と爲し、緒を纂し端を

し、必ず空言ならずして、言の及ぶ所、則ち君臣の禮樂、教化賞罰、包ねざるは無し。竊かに仲舅の文を觀るに……（中略）……斯れ意は賈・馬・劉・班の藩牆に越く者有るか。

この序は、裴延翰が書いたとはいへ、裴延翰は平生から杜牧の詩文に親しんでいたと別の所で述べているから、杜牧の作風、文學觀等、かなり理解していたといえる。この序を見ると、先の「答莊充書」に挙げた五人の文人をも含めて、彼らに對する評價の違いが鮮明に示されている。賈誼、司馬遷、劉向、班固に對する評價が一番高く、司馬相如、揚雄、屈原、宋玉らに對しては、ある程度の價值を認めつつも、結局は難じている。そして、裴延翰は杜牧の作風が、賈誼、司馬遷、劉向、班固らの類に屬するものであると述べている。

ところが、杜牧は、「上宰相求湖州第一啓」（樊川文集卷十六）の中で次のように述べている。

某の弟顓、世胄の子孫にして、二十六にして一たび進士に擧げられ及第す。嘗て上裴相公書を爲る。澹壯溫潤、詞理傑逸。賈生、司馬遷は能く之を爲るも、班固、劉向の輩の疊疊たるの詞に非ず。後輩に流はり、人皆之を藏す。

弟杜顓の作風が、賈誼や司馬遷の作るような「澹壯溫潤、詞理傑逸」の氣風があり、決して、班固や劉向の輩の「疊疊之詞」ではないと杜牧は言っている。賈誼と司馬遷をここに引用したことについては、崔岐なる人物が杜顓に贈った詩を襲っていると思われる。

進士崔岐、文學有りて峭澀にして人を許可せざれども、門に詣りて君に詩を贈り曰く、「賈・馬死してより來  
杜顓を生ず、中間寥落たり一千年。」と。  
（樊川文集卷九 唐故淮南支使試大理評事兼監察御史杜君墓誌銘）

杜牧と韓愈との關係（愛甲弘志）

崔岐及び彼の詩については、現在では知る術もないが、杜牧が、「上宰相求湖州第一啓」で挙げた所の「賈生・司馬遷」は、この崔岐の贈答詩に拠ったものであるにちがいない。「班固、劉向」も、この句の前後にあったと考えられないこともないが、杜顥が死にこの墓誌名が書かれた時点で、杜牧が崔岐の詩を全文掲げていないことから、既にこの句の前後は杜牧自身にも判らず、杜牧が自分で付けたしたと考える方が自然である。そうすると、ここでは、樊川文集序でかなり高い評價を受けていた班固、劉向の文學は賈誼、司馬遷のそれとくらべて一段低くおとしめられている。これからみるかぎり、かなり杜牧の古人に對する文學評價のあいまいさを窺い知ることができ、それでは、韓愈を詩材として取り扱った詩についてはどうであろう。先の「冬至日寄小姪阿宜詩」の中には、古の文人を擧げて次の如く言っている。

經書括根本 經書根本を括し

史書闕興亡 史書興亡を闕す

高摘屈宋豔 高く屈宋の豔を摘み

濃薰班馬香 濃く班馬の香に薰ず

李杜泛浩浩 李杜浩浩に泛かび

韓柳摩蒼蒼 韓柳蒼蒼を摩す

近者四君子 近ごろ四君子

與古爭強梁 古と強梁を爭ふ

この一節は、古の必讀の著書及び文人を擧げているのであるが、既に説いてきた如く、樊川文集の序では、班固・司馬遷を高く評價し、屈原・宋玉にはある程度認めつつも結局は難じており、また「上宰相求湖州第一啓」では、班固を難じているというように、かなり矛盾を孕んだ展開になっている。そうすると、次に續く、「李杜、韓柳」についても、いささか疑問をさしはさまずにはいられない。市野澤氏の論ずるが如く、この部分が、「崇敬する趣旨を鮮明に打ち出している」とは必ずしも断定できないであろう。

## 五 むすび

従来、杜牧と韓愈との関係を論じる場合に、その影響関係を具體的に指摘することよりも、杜牧の韓愈への崇敬ぶりを強調することの方が多かったように思われる。もっとも杜牧の詩文の内に韓愈に言及したものが無いことが、兩者の影響関係を考えることを困難にしているとはいへ、「獻詩啓」の中の「本高絶を求めて」が韓愈を意識しており、また「答莊充書」の中の文學理論が、韓愈の古文の主張とまったく共通するものがあるなどという議論は、じゅうぶんには納得できない。これは、「冬至日寄小姪阿宜詩」や「讀韓杜集」の中で、杜牧が韓愈を高く評價していることに、強く引かれた議論のように思われる。

私は、杜牧が韓愈を評價する問題と杜牧が韓愈の文學を受容する問題とは區別して考えねばならないと考える。本稿では、杜牧と韓愈の文學思想の相違点を指摘する、いわば負の関係を論じることによって、杜牧が韓愈の文學をどのように受容していったのかという問題を鮮明にしようとしたつもりである。

註

- (1) 『杜牧』(筑摩書房 中國詩文選)「古典主義者」一〇一頁  
(2) 『中國中世文學評論史』(創文社 東洋叢書)第六章第

- (3) 四節「韓愈の散文表現論」五〇九頁  
『唐宋八家文』上(朝日新聞社 中國古典選)二一九頁  
(4) 『荀子』(評論社 東洋人の行動と思想14)「Ⅱ荀子の思想活動」一六三頁